

表紙の言葉

『黒漆蓮池人物螺鈿密陀絵印箱』

縦横約12cm・高さ9cm、被蓋造りの印箱です。総体黒漆塗りに、貝を薄くして文様の形に切り取り漆面に貼り付ける螺鈿の技法と、顔料を油で溶いたもので漆面に文様を描く密陀絵の技法を用いています。また、白っぽい顔料を貝の下に塗ることで貝の白さを強調する方法が使われています。

蓋甲(蓋の上面)には、梅の木と水辺に生える蓮、それを眺める高士とお供の者が描かれています。中国では、蓮を意味する「荷」が「和」と同音で、「梅」は「美」と同音であることから、梅と蓮が咲きあう図は「和和美美」と呼ばれ、すべてが円満で順調であるという吉祥文だと言われています。吉祥文とは、よい事やおめでたい事をあらわす文様の総称で、古くから工芸品に用いられてきました。吉祥文には、説話や伝説を基に意味づけされたものや、言葉の語呂合わせによって出来上がったものなどがあり、その種類は動物や植物、それらを組み合わせたものなど多岐にわたります。

作品の側面を見ると、四方を埋め尽くすように蝶の文様が描かれています。よく見ると、羽の形や模様が一羽ずつ異なり、いろんな種類の蝶が飛び回っているかのようです。蓋甲に描かれた文様とは大きく印象が変わり、かわいらしい雰囲気が漂っています。

蝶は、飛び回る姿が華麗で色鮮やかなことから各地で文様として用いられていますが、吉祥文としての意味も持っています。「蝶」の字が八十歳の意味

を持つ「臺」と同音なため、長寿を表すのです。

一方、琉球では、蝶は「ハベル」・「ハビラ」と呼ばれ、神の使い、精霊などと言い伝えられてきました。琉球最古の歌謡集『おもろさうし』にも蝶が登場する歌が収められています。

あがおなりみかみの

まぶらてゝおわちやむ

やれゑけ

又おとおなりみかみの

又あやはべるなりよわちへ

又くせはべるなりよわちへ

この歌は航海に関するおもろの一つで、おおまかに訳すと【我々のおなり神が(船を)守ろうとして来られたのだ。おなり神は美しい蝶になって来られたのだ。】となります。おなり神とは、兄弟を守る霊力を持つ姉妹神のことで、姉妹が兄弟の安全を守護する霊力をそなえもつというおなり神信仰は琉球各地に伝わっています。そのおなり神が船を守るために蝶に姿を変えて表れたことを称えた歌です。この歌からも、琉球の人々が蝶を霊的なものとして捉えていたことが感じられると思います。

この作品は10月8日まで常設展示室第1室にて展示中です。ぜひご覧ください。

(伊禮)

漆器の寄贈がありました

6月に2件の漆器の寄贈がありました。

1件は横浜市の平良真喜子さんからで、明治から昭和初期に掛けて沖縄で作られ本土向けに販売された盆や菓子器など9点です。米次や浅田といった戦前の大手漆器店で作られた漆器で、芭蕉やパパイヤなど南国らしい文様はこの時代盛んになったデザインです。

もう1件是那覇市の翁長良明さんより、中国の竹幣と沖縄の漆器会社「紅房」の復帰前後の小鉢など7点です。竹幣は中国清時代に中国南方の民間で使われた代用貨幣の一種で、竹製で漆がかけられた非常に珍しい品です。「紅房」の小鉢も当館の収蔵品にない種類でした。

寄贈していただいたお二方には深く感謝するとともに、寄贈品は企画や常設などに展示活用していきます。今回の寄贈作品は、後期常設展示で特集コーナーを設けて紹介する予定です。



竹幣

「琉球八景掛け軸」発売!

琉球八景とは、浮世絵師・葛飾北斎が描いた琉球の浮世絵です。泉崎や久米村など8ヶ所的那覇の名勝地が風情豊かに描かれています。当美術館では、その琉球八景全8枚を所蔵していますが、作品の劣化を防ぐため、頻りに公開することが出来ません。そこで、この度、掛け軸を作成し販売を始めました。

高密度、超高精細デジタル処理技術を駆使し、原画に忠実に複製した琉球八景を情緒豊かな掛け軸に仕立てました。今は無き幻想的な那覇の風景を会議室や自宅のリビングに飾ってみてはいかがでしょうか。

でも、かの有名な葛飾北斎が、本当に琉球に来て「琉球八景」を描いたのでしょうか?その答えは、3月に販売開始された「琉球八景パンフレット」をご覧ください。

掛け軸	1点	38,000円(税込み)
	8点セット	300,000円(税込み)
パンフレット	1冊	350円(税込み)

浦添市美術館内ミュージアムショップにて好評販売中

編集・発行

浦添市美術館

URASOE ART MUSEUM

〒901-2103 沖縄県浦添市仲間1丁目9-2

Tel: 098-879-3219 Fax: 098-878-1221

<http://www.city.urasoe.lg.jp/art/>